

# 適性型 I 表現力

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は四十分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入すること。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受験番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

問題は1ページからです。

1 文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。

(\*印のついている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

小学校時代、僕は「ごいつにだけは負けたくない」という読書友達がいた。その後の僕の乱読生活は、ひとえに彼とのライバル意識が生んだものである。僕はもともと、本は大嫌いだった。あの人参<sup>にんじん</sup>とピーマンと並んで、本は僕の三大苦手の一つであった。人参は必ず、グラッセにしてみらわなくては食べられなかったし、ピーマンは微塵<sup>みじんぎ</sup>切りにして、チャーハンに混ぜてもらわなければ、口にすることができなかった。親は好き嫌いの激しい僕に相当頭を悩<sup>なや</sup>ませていたようだ。食べ物なら、まあそうやって調理に工夫を凝<sup>こ</sup>らせれば何とかだったが、本はそうはいかない。母親はそんな僕をよく回想して話の種にする。「あげん本は好かんかったくせに、小説なんか書きよってからに……」(ちなみに母は九州の女である)

小学校時代のそんなある日、僕らが住んでいた福岡の社宅<sup>とんり</sup>の隣にある一家が移り住んで来た。父母兄妹の四人家族で、(ちなみに僕のところは父母兄弟である)長男ヨー君は僕と同じ年であった。問題の負けたくない読書友達というのが、そのヨー君である。彼は信じられないほどの読書家だった。小学校の四年生ぐらいで、既にヘルマン・ヘッセの『車輪の下』を読んでいた。別に彼が勝手に読書家であるぶんには構

わなかったのだが、いかんせん僕の父は人一倍負けず嫌いだったので、隣の両親と共に青山学院大学出身であると知ると、父は負けずに\*アイビールックを購入<sup>こうじゆう</sup>したほどののだ。(ちなみに父は中央大学出身で、どこか\*垢<sup>あかぬ</sup>抜けないと、自分で思いこんでいる節があった)

とにかく、父は走って飛んで来て、マンガを読んでいる僕を叩<sup>たた</sup>いた。「いいか仁成、ヨー君は今、ヘッセを持って社宅の門のところ立っていたぞ」と。その当時の僕に、ヘッセが何であるか分かうはずもない。第一、ヨー君もヨー君だ。何もヘッセを持って社宅の門のところ立つこともないだろうと、ヘッセがドイツの小説家であることを知ったとき、僕はそう思ったものだ。

数日後、父はヘッセの『車輪の下』を買って来た。僕はペラペラとページを捲<sup>めく</sup>ってみたのだが、とてもあの頃の僕に太刀打ちできる代物<sup>しろもの</sup>ではなかった。ただ、僕は投げ出さなかった。それを読めば、ヨー君みたいに大人たちから「すごい」と誉<sup>ほ</sup>められるのだから。当時、僕はヘッセを読破<sup>よみと</sup>することが子供の\*ステータスを得る近道だと考えたに違いない。確かに、ヘッセを持ち歩いていると、父や母や、周りの大人たちの僕を見る目が違<sup>ちが</sup>った。

父はそれから、事ある毎<sup>ごと</sup>に、僕に本を買い与えた。隣家<sup>りんか</sup>と仲良くなればなるほど、父の負けず嫌いはひどくなった。あるとき、狭<sup>せま</sup>い勉強部屋に『世界名作全集』が、でんと転がっているのを見て、僕は途方<sup>とほう</sup>に暮れたものだ。きっと隣の家へ皆で食事をしに行ったときに、同じような

ものをヨー君の勉強部屋かどこかで見つけたに違いなかった。

しかし、ヘッセとの出会いはそんなふうにかなり不純なものではあったが、五年生に進級する頃には、僕は僕なりにあの本を読破していたのである。一冊の本を最後まで、はじめて読み通すことができたのも『車輪の下』が初めてで、その感動も大きかった。そして何より、名作に触れられたことが、後の僕に大きな変化をもたらしたのだ。僕は、主人公のハンスとその親友のハイルナーに心を動かされた。友情ということの意味を真剣に考えるようになるきっかけとなった。更に、『車輪の下』はヘッセの自伝的小説であることを知り、僕は図書館に通って彼の歴史と他の作品を学ぶようになるのである。そして五年生の冬には、僕は最初の詩（「自転車」）を、創作するまでになっていた。

その頃には、僕はヨー君とも打ち解けて、ライバル意識は友情へと転化されていたのだ。僕たちは、図書館で借りた本についてよく話すようになっていた。ヘルマン・ヘッセ、ジツド、ヴェルヌ、ステイブソンなどが、その話題の中心だったが、僕はヨー君自身が書いた詩が一番好きだった。僕の書いた詩について、かなりの\*酷評をした次の日に、彼が僕に見せてくれた詩は、本を読むということがどんなに素晴らしいことかということを謳ったもので、僕はそれを読みながら、震えたものだった。

小学校五年生の冬、僕は九州から北海道へと転校した。気温差六十度の移転だった。帯広という街は、雪に閉ざされた極寒の街だった。外

に出て遊ぶこともできず、僕の読書癖はそこで本物となった。

そしてヨー君から送られてきた最後の手紙には、「これからドストエフスキーを読み始める」と書かれてあった。僕のまだ知らない未知の作家であった。

（辻仁成『そこに僕はいた』より）

#### 〔注〕

- ・アイビールック——一九五〇年代にアメリカで生まれたファッションスタイル。
- ・垢抜けない——姿や身のこなしがすっきりしないこと。
- ・ステータス——社会的な地位・身分の高さ。
- ・酷評——手きびしい批評。

## 文章2

本を読むこと、とくに小説を読むことは、かつては「勉強」や「学問」に入っていないかと思えます。「学問をなさい」とは言っても、そこに小説は入っていないかった。今は子どもに「本を読まないとちゃんとした大人になれない」なんて言うけれど、いったいいつからそんなふうになったんだろう、と思います。べつに本を読んだからって賢くなるわけじゃない。

僕が学生のころ、戦前世代の先輩たちに聞くと、「親に隠れて読んだ」とか、「読む本がないから隣のおじさんから立川文庫を借りてきて片っ端から読んだ」とかいう話ばかりでした。「本なんか読むとろくな人間にならない」と言われて育ったとも言っていました。

\* 大正デモクラシーの影響を受けた進歩的な親たちはそうじゃなかったかもしれないけど、ほとんどの親は、こういう小説のたぐいをまともな人間が読むと、くだらないことを覚えるだけだと思っていた。ろくでもない考え方を持ってしまったって、額に汗して働くことをしなくなるんじゃないかとか、そういう不安を持っている大人たちが多かったんです。

大人のほうの考え方が変わったのは、戦争に負けたのが大きなきっかけになったと思います。「ものを考えないからこういう愚かな戦争をやって国を亡ぼすんだ」って。それで「本を読まなきゃいけない」って変わったんだと思います。

もちろん、明治のころもその前の時代も、学問としても、楽しみのためにも、字を読んでいた人はたくさんいた国です。でも、今のような形で本がいっぱい周りにあるようになったのは、ずっと後ですね。本を読むと\*情操教育になる、価値観を豊かにするために本を読まなければいけないとごく一般的に言われるようになったのは、まさに戦後だと思えます。

(中略)

日本ってある意味ではいい国なんです。子どもだけで図書館に行つて、いろんな本に出逢うことができる。図書館に行けばいくらでも本がある。僕が子どものときよりも、環境としては本が読めるようになっていきます。わが国は、そういうチャンスを子どもたちに与えることはできたんです。

でも、たき火をして危険なことをするチャンスは奪っているんですね。子どもにとって危険なことというのはほんとうに危険で、ほんの浅い池だって子どもは死んでしまうことがある。\*紙一重なんです。大人としては、いつもそういう危険を覚悟していないといけない。子どもを木に登らせるといのは、ほんとうにおそろしいことです。はじめのうちは用心深く登ったり下りたりしていますけど、だんだん大胆になっていく。すると落っこちる。じっさいやってみると大変です。それでもたき火をやらせてあげなきゃいけない。

今の世の中全体のこと、政治がどうか、社会状況がどうか、

マスコミがどうのこうのということじゃなくても、自分ができる範囲  
で何ができるかって考えればいいんだと思います。それで、ずいぶんい  
ろんなことが変わってくるんじゃないでしょうか。

本には効き目なんかありません。振り返ってみたら効き目があった  
ということにすぎない。あのときあの本が、自分にとってはああいう意  
味があったとか、こういう意味があったとか、何十年も経ってから気が  
つくんですよ。

だから、効き目があるから渡す、という発想はやめたほうがいいと思  
っています。読ませようと思って、子どもは読みません。親が  
一生懸命本を読むと子どもは読まなかったり、お兄ちゃんが一生懸命  
読むと妹は読まなかったりね。本を読んでさえいればいいというもの  
でもない。本ばかり読んでいる子というのは、ある種のさびしさがあ  
るからですよ。外で遊んでいると忙しいですからね。

ですから、本を読むから考えが深くなる、なんていうことはあまり考  
えなくてもいいんじゃないでしょうか。本を読むと立派になるかとい  
うとそんなことはないですからね。読書というのは、どういう効果があ  
るかということではないですから。それよりも、子どものときに、自分  
にとってやっぱりこれだという、とても大事な一冊にめぐり逢うこと  
のほうが大切だと思いますね。

どこか気に入った本を見つけて、その世界のなかにほんとうに入り  
込むくらいまで読んでみると、日本語しか見ていないのに、「この\*  
翻訳

はおかしい」と指摘できるようになったりします。本は面白いものです。

(宮崎駿『本へのとびらー岩波少年文庫を語るー』より)

## 〔注〕

・大正デモクラシー——日本で一九一〇年代から一九二〇年代

(おおむね大正年間)にかけて起こった、

政治・社会・文化の各方面における民主

主義の発展、自由主義的な運動、風潮、

思潮の総称。

・情操教育

——感情や情緒を育み、創造的で、个性的  
な心の働きを豊かにするためとされる教

育、および道徳的な意識や価値観を養う

ことを目的とした教育の総称。

・紙一重

——紙一枚の厚さほどの、わずかなちがい。

・翻訳

——ある国の言語を他の国の言語になおすこ  
と。

〔問題1〕

**文章1**の中で、筆者はヘッセとの出会いを不純と言っています。どういう点が不純だったのか、三十字以上四十字以内で書きなさい。(、や。などもそれぞれ字数に数えま  
す。)

〔問題2〕

**文章2**の中で、戦前と戦後の大人たちの読書に対する考  
え方の違いが書かれています。その違いについてまとめた  
次の文が完成するように、「①」と「②」にそれぞ  
れ三十字以上四十字以内で、本文中のことばを使って書き  
なさい。(、や。などもそれぞれ字数に数えます。)

・戦前の大人たちは、本を読むと「①」と  
考え、読書に否定的だったが、戦後の大人たちは戦争に負  
けた影響もあり、本を読むと「②」と考  
えるようになった。

〔問題3〕

あなたが考える「読書の意義」とは何ですか。

**文章1**と**文章2**、それぞれの要点にふれ、あなたの考えを

四百字以上、四百四十字以内で適切にまとめなさい。

ただし、次の条件と、左の「**きまり**」にしたがいなさい。

条件1 三段落構成にし、第一段落には、**文章1**と**文章2**、それ

ぞれの要点をまとめること。

条件2 あなたの考えは、一つにしばって書くこと。

条件3 考えの根拠・理由も書くこと。

〔きまり〕

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行がえは、段落をかえるときだけとします。

○段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。

○最後の段落の残りのます目は、字数として数えませんが、





